

令和の大修理 薬王院本堂

—国重要文化財薬王院本堂保存修理事業のあゆみ—

第2号

工事進捗状況

令和5年4月から9月にかけての修理現場の様子を紹介します。

仮屋根内部

本堂を覆う巨大な仮屋根の内部は、単管パイプと足場板が縦横に張り巡らされています。職人や現場管理者は、この足場を伝って堂周囲を移動し、様々な作業を行っています。写真は本堂の妻側（横）です。最上階まで上ると、破風板や棟の端部の様子がよく観察できます。



棟包み解体

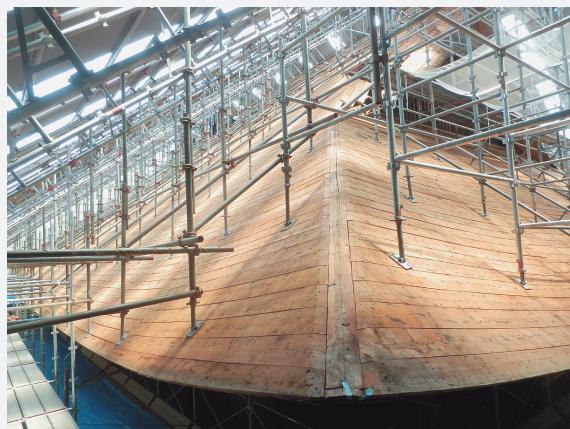
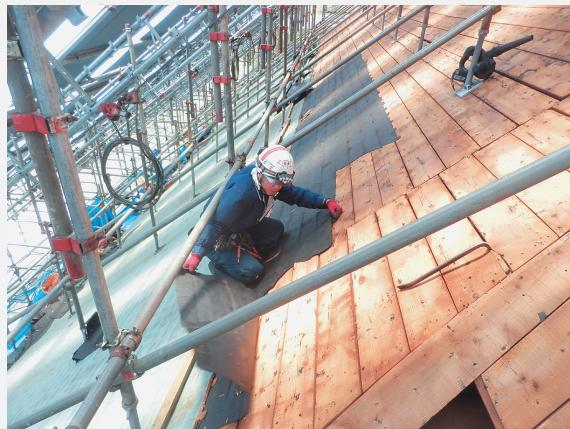
屋根の頂点を棟と言います。横から見るとアーチを描くような形の棟を、銅板がくるりと包み、さらにその上から木材で押さえつけています。職人たちが注意深くこれらの仕組みを取り外し、木下地が露出しました。今後、木材の破損や腐れ状態を調査し、どの程度の修理が必要かを検討していきます。



◆このパンフレットは国・茨城県・水戸市の補助を受けて実施中の保存修理事業の一環として作成しています

平葺解体

屋根の大部分に葺かれているのが、平葺銅板と呼ばれる平らで細長い銅板です。元々は銅本来の赤褐色の光沢を帯びていましたが、経年変化によって緑青色になっています。解体を進めると、銅板の下には、雨が滲み込んだ際に軒（屋根の先）方向に水を逃がすルーフィング材、さらにその下に木下地が見えてきました。こちらも今後、木材の状態を調査し、どの程度の修理が必要かを検討していきます。



連続コラム ココに注目！薬王院修理 Vol. 2

世代を超えて受け継がれる職人の仕事

工事期間中の本堂を雨・風から守る仮屋根工事を経て、GW明けより銅板解体工事を行いました。銅板解体初日、東側の軒裏銅板に、前回修理（昭和45年）の裏書き（職人さんのメモ書き）を発見しました。会社名、名前、年号などが書かれており、なんと、今回の屋根工事会社と同じ会社です。発見した職人さんが教わった方の名前もあり、まだご存命だそうです。先輩を超えた仕事を！と張り切っています。

工事担当 風基建設株式会社 小倉英世



発見された銅板裏書き